
ing

梵久楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ing

【Nコード】

N8048C

【作者名】

梵久楽

【あらすじ】

偶然出会った若者達がバンドを組む。それぞれが様々な境遇で、悩みを持ち、自分を変えたいと強く願っている。

サトシ編

『なんで僕だけ・・・』

12月の寒い夜の中、小太りの男が道を急いでいた。街はすっかり冬だというのに顔から汗が滴り落ちている。

久しぶりに誘われた合コンで買出しを頼まれたのだ。頼まれたというよりも押し付けられたといった方が正しい。他の男達はそれぞれお気に入りの子と楽しくやっつてるに違いない。

人数合わせの為に誘われたのは間違いないが、本人はこの日を1ヶ月も間から楽しみにしていたのだ。

『くそ・・・きつと僕がない間に皆良い雰囲気になってるんだろ
うな。いつも僕ばかりこんな損な役を引き受けるんだ・・・』

周りはカップルだらけ、その中汗をかきながら一人小走りの男を見て、何組かは指を指して笑ってるものまでいる。

『くそ、くそ・・・』

彼の名前はサトシ。大学3年生で、留年がほぼ確定しているが、本人に焦るそぶりもなくむしろ開き直っている。将来アパレル店員になりたいと言っているがそれに向けての努力は一切していない。皮肉たつぷりで他人には厳しく、自分に甘いという典型的な嫌われるタイプの人間だ。

『確か、この近くにコンビニがあったはず。早いとこ買って戻ろう・・・』

カゴいっぱいビールやらチューハイなどを詰めレジに向かった。財布の中身は3000円しか入っていない。足りるだろうか……。

『くそ……後であいつ等に金を払わせなきゃ……』

まるでロボットのように機械的なコンビニの店員は無表情でバーコードを読ませ続けている。

『3364円です。』

『え？そんなにするの？すみません……じゃあこれとこれ返します……』

明らかに苛立ちを見せる店員にサトシは文句を言い放った。

『何か不満でもあるんですか？』

『いえ……』

小さな男だ。店員は言い返せないのが分かっているから皮肉たつぷりに言ってるのだ。

帰ってからこの男は仲間達に大儀にこう話すだろう。

『店員の態度があまりにも悪かったから、説教してやったよ。そしてたら店員は半べそかいて謝ってきやがった。謝るくらいなら最初からまじめにやればいいんだよ。』

自分より弱い立場の人間にウサをはらしたサトシは幾分か良い気分

になってコンビニを出た。

考えてみれば、こういった負のオーラをまとった男も珍しい。というより、本当に可哀想な男だ。

自慢できることとはいえ小学生の時から高校までやっていた剣道のことくらいしかない。

大会成績は？と他人に聞かれたら口をつぐんでしまおうが、これくらいしか自慢するものがない。

大学に入って女の子にモデル為にと軽音部に入ってみたが、才能がない彼にとって居場所などはなかった。しょうがないのでやっている人が少ないからバンドに誘われるという理由でドラムをやることになった。しかし、バンドの誘いは少なく、自分から積極的に誘うが誰も彼とバンドを組みたいと思わなかった。

誰だって恥をかきたくない。サトシとバンドを組んだら恥をかかなくはない。それが周知の事実となっていたのだ。

コンビニを出たサトシは、ポケットから煙草を取り出し火をつけた。真っ暗な夜の中に煙が吸い込まれていくようだ……。立ち上がる煙を見つめながらサトシは深く溜息をついた。

『僕以上に不幸な奴がいるなら見てみたいよ……。きっとどんな奴より僕は不幸だ。どんな努力したって僕には才能がなくて意味が無いんだ。それなら最初から努力なんてしなくたっていい。』

どんどん自分を追い込み、暗くなり不機嫌になっていく彼を仲間はずれに思っていた。ただのロクデナシだと思っていない。

このまま奴と付き合ってもメリットなんてない。早いとこ見切りをつけて放出してしまおう。

最後に合コンでも誘って気分をよくしてやろう。これが今日の合コンメンバー達のもくろみだった。

しかし、予想に反して集まった女の子達が可愛いかった。サトシなんておかまいなしにガツガツいってしまるのが男のサガというものだろう。

完全に居場所を失ったサトシは不機嫌になり、周りの空気を悪くする。面倒だから買出しにでも行かせてやれといった意見があがり、幹事の男がサトシに買出しに行ってくれと頼んだ。もちろんサトシはそれを断った。しかし、幹事は

『お前がいない間にお前の株をあげとくよ。どの娘がいいんだ？』

と言ったので、サトシは最初に会ったときに良いなと思った娘の名をあげた。

彼は決してめんくいではない。誰も見向きもしなかった女の名前があがったので幹事は心の中で『こいつは本物のバカだ。』と思いつつ、彼に

『分かった。アケミか？悪いようにはしないよ。適当に酒買ってきて戻ってきた頃にはあの娘にお前の良い所を植え付けといてやるよ。』

その言葉を完全に信じサトシは買出しへと向かったのだ。サトシには長所というか短所でもあるのだが、すぐに人を信じるという一面があった。それを知っている仲間は良いように彼を利用してきた。どちらが悪者かと言えば、サトシよりも仲間の方がもしれない。しかしそれに気付かないサトシも救いようが無い。

コンビニから帰る途中、サトシは八王子駅の前を通っていた。店の大きな曇りガラスの前を通った時、大きなコンビニの袋を2つ持った自分がそこに映し出されていた。なんて可愛そうな奴だ・・・目頭が熱くなってきたが人通りの多いこの場所でコンビニ袋を持った男が泣いていたとあつては一生八王子に来れなくなってしまふ。この幸せそうな顔をした奴らが友達なんかに面白おかしくその話をするんだらう・・・。

そう思った途端サトシは我に返り、ガラスに映った自分に対して哀れみと軽蔑を込めた視線を送った。

八王子駅の広場を通った時、1人の男が路上ライブを行っていた。そういえば、さっきから歩きっぱなしで足が痛いし、喉もカラカラだ。コンビニ袋からビールを1缶取り出し、それを喉に流し込んだ。路上ライブを行っている男の前には誰もいない。お互いの事に夢中になっているカップルや、千鳥足のサラリーマン、学校帰りの高校生なんかはその男の前を行き交っている。

サトシはそれが他人事のように思えなかった。

『存在感』の無いもの。いてもいなくても同じなもの。まさにあの男は自分だ。

見た目は自分よりも男前で背も高いが、それは今は関係ない。ビニール袋を持ったまま奴の前に立って歌を聴くのもなんだか恥ずかしい。サトシはすこし離れたところから男の歌を聴いていた。決して上手いとは言えない。どれもありがたき曲だ。

少しすると男がギターをしまいだした。

『なんだ終わりが・・・』

そう思って残りのビールを飲み干して腰をあげた。そして最後に自分と同じ境遇にいる人間に目を向けると彼の前には女の子が立って

いた。何やら女がその男に話しかけている。サトシはなぜか好奇心にかられその会話をなんとかして聞こうとした。雑音でよく聞こえないが女はもう1曲歌えと男にせがんでるようだ。せっかくだから俺もあと1曲だけ聴いていこう。

どうせ帰ったって誰も喜んでくれないし、奴らが待ってるのは俺なんかじゃなくて袋の中に入った無機質の媒体だけだ。

その男は女の懇願に負けた様子でギターを取り出し、おもむろに歌いだした。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

曲を聴き終わった時、サトシの目から涙が溢れ出した。なぜかは分からない。ただただ涙が流れてくる。悲しいのか、寂しいのかそのどれもがあてはまった感情が一気にサトシの心の中を駆け巡り涙腺を暴発させたのだ。

5分くらいだろうか？1時間くらい感じる。サトシはその場に座り込んでいた。何を考えるわけでもなく、ただ座っていた。もうあのギター男も女もない。きつと帰ったのだろう。

煙草に火をつけ空を仰いだ。さつきから見えていた空がやけに透き通って見えた。

『戻ろう・・・』

合コンが行われている友人の家に着いたが何度チャイムを押しても友人は出てこない。

友人に電話をしたところ1分くらい鳴らしてようやく友人が出た。

面倒くさそうな口調で

『今カラオケ。駅前のカラオケだから良かったらきなよ。』

この言葉でサトシは自分が置かれていた状況を完全に理解した。無言で電話を切り、友人の家の壁に向かって思いっきりコンビニ袋を投げつけた。袋の中からさっき買った酒のやまが転がり落ちてきた。されがサトシの足元で止まったがサトシは拾いあげることなくその場を立ち去った。

もちろん腹は立ったがなぜか清しい。これから始まる何かに期待してサトシは自分の家にと帰っていった。

ナオキ編

夜の10時、八王子駅の広場でナオキはギターを掻き鳴らしていた。

誰かが立ち止まって聴くわけでもなく、誰かに聴いて欲しいわけでもない。

彼が東京に出てきてからもう3年が経つ。思えばあつという間であつた。

東京に憧れ、親の反対を振り切り上京してきた時は八王子という田舎であっても彼にとって夢の様な気分であつた。

『この街で俺は成り上がるんだ……。』

Tシャツにポストンバック、そして肩には大きなギターを抱えていた。

夢と興奮に包まれながらこれからの自分に期待を膨らませ続けた。

あれから3年、今の彼はというと日本に何万といるストリートミュージシャンのままだ。

昼はコンビニでアルバイトをし、夜は八王寺駅で路上ライブ、そして月に3〜4回小さなライブハウスでライブをこなす。客の入りは良くて30人、悪い時は2〜3人くらいの時もある。

『こんなはずじゃなかった……。』

この言葉がこの3年間ナオキの頭の中を埋め続けるのである。

正直言つて彼は頭の良い男ではない。まず住み着く場所に八王子を選んだ理由が不純であった。

ミュージシャンのメツカ下北沢、桜木町などを選べばいいものを・
・よりによつて八王子とは・・・。

もちろん彼には彼なりの理由があった。

ストリートミュージシャンが五万といるそのような地に行つて自分が成功するはずがない。特に歌唱力に自身があるわけでもなく、飛び抜けてギターが上手いわけでもないのなら・・・。

それなら聞いたことのある地、八王子で勝負してみよう。そして名前を上げていつかはプロになろう。

そう考えてかれこれ3年の時間を浪費したのだ。

本当は気づいていた。自分が成功しないことを。ただそれを認めてしまえば、親と絶縁状態になつてまで上京した意味がなくなつてしまふ。

あの時、地元の友人達に放つた臭い言葉がただの戯言になつてしまふ・・・。

TVで音楽番組を見るたびにナオキは己の無力さと小ささに落胆してしまふのだ。

12月の八王子は寒い。雪は降っていないのに、手はかじかみ、行きかうカップル達の幸せそうな顔がナオキの心をどんどん曇らして

いく。

街はもうすぐ来る一大イベント、クリスマスの為に大盛り上がりだ。ショーウィンドは赤と緑、白、青、黄と様々な色で装飾され、はちきれんばかりの輝きを見せている。

ほとんどの店からクリスマスソングが流れ、ナオキの歌さえ掻き消してしまうのだ。

『もうすぐでクリスマスか・・・』

この時期は今のナオキにとっては相当堪えるのである。

地元に残してきた彼女も今は連絡さえ取っていない。新しい男ができたという噂を昔の友達から聞いたがあいつは今、幸せにやってるのだろうか？

おそらく自分以外の男と付き合っているなら誰だって幸せになれるだろう・・・

一人暗い気持ちになっている男の歌を誰が聴きたいと思うか。

無我夢中で掻き鳴らしたギターは1弦が劣化し、バチンツという音を鳴らして切れた。

『今日はもう帰ろう・・・』

ナオキはギターをハードケースにしまい、帰る準備を始めた。明日もまた昼からバイトだ。一体この生活がいつまで続くのか・・・い

っそ、ここで凍え死んでやりたい。

幸せそうに歩く奴等に自分という存在を叩きつけてやりたい・・・

『あれ〜？もう帰っちゃうの〜？暇だしあなたの歌聴いてあげよう
と思っただのに〜・・・』

女の声が聞こえた。いつものナオキなら喜んで歌を聴かせるのだが
今日はすこぶる機嫌が悪い。顔も上げずに小さな声で言い放った。

『1弦切れたから今日はもう終わり・・・また今度暇な時にでも聴き
に来て。』

暇じゃなかったら俺の曲なんて誰も聴く気にならないんだ。どれだ
け心を込めて歌ったって、結局はこいつらの暇潰しにしかならない
んだろ・・・

『じゃ〜、最後に1曲だけ歌って！ね！？お願い！』

しつこい奴だ・・・こつこつ奴はこつこつが無理だつて言っただつて聞く
耳をもたない。

歌わなかったら勝手に俺のことを調子に乗った奴だつて言い放つん
だろつ。

『ふー・・・分かったよ・・・1曲だけだよ。どんな歌が良い？』

『そつだなあ。どんな歌が歌えるのお？』

『オリジナルばかりだけど・・・』

『じゃあねえ・・・悲しい歌が良い。今日みたいな日にぴったりの歌。』

『今日のどこが悲しいの・・・？街は大盛り上がりでしょ・・・。』

『うんう・・・悲しい歌がいいの。』

『分かったよ・・・歌えばいいんでしょ・・・。』

こうなりややけくそだ。どうせ1弦が切れてまともに歌えやしない。自分が作った曲の中でも1番暗い歌を歌ってやる・・・

ナオキはハードケースからさっきしまったギターを取り出した。

『じゃあ1曲だけ。今日みたいな最悪の日に君だけの為に歌うよ。Kっていう歌。』

その時始めて目の前にたつ女の子を見た。

今風な女の子だ。色が白くて、身長は160くらい。細身で、ニット帽を深くかぶってる。顔はちゃんと見えないけど目鼻立ちが通った綺麗な子だ。

きつとこの娘も彼氏を待ってるんだろう。その時間潰しに俺に歌を歌えって言ってるんだろうな・・・。

ナオキは無我夢中で歌った。嫌な事を全て忘れる為に。

実はこの曲はナオキが地元に残してきた彼女を想って書いた曲なのだ。だからナオキにとってこの曲は特別で、大切な曲なのだ。

目の前の女の子の為にとは言ったが私情を交えないでこの歌を歌うのは難しい。

色々な事が頭の中で蘇ってくる。楽しかった思い出ばかりだ……。思い出はいつも美化されて、悲しかった記憶なんかはどんどん隅のほうに追いやられていく。

自分が今歌っている歌はそんなナオキの美化された記憶が詰まったものだった。

最後のサビを歌い終えて深い溜息をついた。

『どうかな？これで満足してくれた？俺もう帰るから。もう遅いし八王子だつてあんまり治安は良くないから彼氏を待つてるんだつたらファミレスかどっかに入るときだよ。』

『……ありがと……。Kってあなたの彼女の名前なの……。？』

『え……。？まあそうだけど……。今は彼女じゃないけどね。』

『そっか……。素敵な歌だね。本当に今日みたいな日にぴったり。』

『そうかな？ちゃんと聞いてくれたんなら感謝するよ。今日は誰も俺の歌なんて聴いてくれなかったから。』

『あなたは名前なんていうの？私はユキだよ。』

『俺はナオキ。たぶん覚える必要ないけど、ここでよく歌ってるからまた聴きにきて。』

『うん……。絶対くるね。』

『じゃ……。』

変わった娘だ・・・自分の歌にあそこまで感動してくれるなんて。
でも悪い気はしない。

こんな日にも良い事が一つだけあって良かったな。
今日は帰ってゆっくり休もう。

ユキ編

テーブルの上にはラップに包まれた夕食が乗っている。どこかのスーパーで売られていた惣菜を皿の上に盛り合わせたただけだろう。

『レンジで温めて食べてください。帰りは遅くなります。 母より』

女は無言でそのメモを破り、皿の上に乗った惣菜を全てゴミ箱に捨てた。

財布の中には600円ちょっと入っている。外でハンバーガーでも食べよう……。

この女の名前はユキ。専門学校の2年生。父親と母親の3人で暮らしているが、ユキが学校から帰ってきても家族の者は誰1人といない。

母親は夜の仕事をしていた、父親は愛人の家に泊まりこんで1週間くらい帰ってきていない。

たまに顔を合わせると学校の成績や就職のことについて口煩く聞いてくるのだ。ユキはいつも『良い感じだよ。』とだけ答えて自分の部屋にこもるのだ。

そんな生活がもう3年近く続いている。

ユキが高校3年の時、両親は彼女に4年生大学に進学することを強く望んだ。その当時の彼女に将来の夢など微塵もなく、ただその時を楽しく過ごせたら良いという考えだけだった。

いつもの様に、アルバイトから帰ってきてリビングに入ろうとした

時、両親が会話している声が聞こえてきた。

『いつからあの子はあるな風になってしまったんだろう。きっとお前があの子を甘やかしすぎたんだ。お前がもう少しあの子を厳しく育ててたらあんないい加減な子にはならなかったんだ。』

『よく私のせいでできるわね？あなただっけ？いつも会社が終われば接待だなんだって言って、女の家に戻ってるんでしょ？私知ってるのよ！』

ユキにとって両親の喧嘩を目の当たりにしたのは初めてだ。喧嘩の理由が自分であるということにユキは愕然とした。あんなに優しくったパパが浮気をしているなんて・・・これもユキのせいなの・・・？

両親に気付かれないようにユキはこっそり自分の部屋に入った。震えが止まらない。

頭の中は真っ白になり、必死で泣き声を堪えた。涙が止まらない・・・。

その日以来、ユキは両親と口をきかなくなった。何かを聞かれても曖昧な返事をするだけで目も合わさない。

両親の喧嘩も日に日に酷くなる一方だ。必死に耳を押さえて布団にもぐりこんでも両親の声が聞こえてくる。父親の浮気相手のことや、ユキの成績のこと、今までの両親からは想像がつかないような罵倒が飛び交っていた。

『もうやめて・・・』

ユキがいくら布団の中でこの言葉を呟いても喧嘩がやむことは無か

った。

このままじゃ家族がめちゃくちやになる……。何とかしなきゃ。そんなユキの考えも虚しく父親は家にあまり帰ってこなくなった。

外はもう暗くなっている。行き交う人の群れはクリスマス近くということで、いつものこの時間帯に比べればかなりの数だ。

無言で目的のバーガーショップに向かった。

毎年家族と一緒に過ごしたクリスマスは今ではお互いが忌み嫌うものとなった。

ユキにとってこの季節は1番自分を追い込むのだ。

『私が良い子にしていればママもパパもこんな風にならなかったのに……。』

そんなことを考えながら1人駅の近くを歩いていると店のショーウィンドウの前に小太りの男が両手にコンビニ袋を持って佇んでいるのが見えた。

その男にユキはなぜか親近感を覚えた。『きっとこの人も幸せじゃないんだろっな……。』そう思いながら、ユキはその男の横を通り過ぎた。

駅前にはカップルで渦巻いている。耳をふさぎたいほどの幸せそうな笑い声が飛び交っていた。

『昔はよくここまでパパを迎えに来たりしたなあ……。』駅前広場を歩きながらユキはそんなことを考えていた。

ふと目をやると1人の男がストリートライブをしている。

『別に急ぐ予定があるわけでもないし、ちょっと聴いていこうかな。』

その男の近くまで行くと男は歌うのをやめたらしく、ギターをかたずけ始めていた。

『あれ〜？もう帰っちゃうの〜？暇だしあなたの歌聴いてあげようと思ったのに〜・・・』

思わずユキはその男を呼び止めた。男は少し迷惑そうに今日はもう終わりだとユキにつげた。

せっかく聴こうと思ったのに聴けないということとはユキにとって納得のいくものではない。ユキのちょっとした自己中心的な性格は生まれついていたものだった。

どうにかして男を説得し、無理やりにも歌わしてやろうと考え、しつこく粘った。

先に男の方が根負けしリクエストに応じてくれるという。

『なんだっていいけど・・・』ユキは心の中でそう呟いた。

せっかくだからこんな不幸せな自分にあっただ悲しい歌でも聴いてみよう。

ユキは男に言った。『じゃあねえ・・・悲しい歌が良い。今日みたいな日にぴったりの歌。』

そうすると男はギターを弾き歌いだした。

男の歌が特別上手いわけでもないのにやけに心に染みる歌詞だ……。なぜか今までの辛かったことが一気に思い出されて気が付けば涙が流れていた。

歌い終わった男にユキは良い曲だねと伝えた。

男は少し嬉しそうに微笑んで帰る準備を始めた。

『名前は？私はユキ』

『俺はナオキだよ』

男はそのまま帰って行った。

『また聴いてあげてもいいかな』と心の中で呟き、ユキはバーガーショップに向かった。

家に帰ってからあの曲のことがユキの頭から離れなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8048c/>

ing

2011年1月27日04時15分発行